（歌垣）杵嶋曲（きしまぶり）　肥前風土記逸文

霰（あられ）降る　杵島（きしま）が岳（たけ）を　険（さか）しみと
草取りかねて　妹（いも）が手を取る

霰（あられ）が降ってきて
辺（あた）りがよく見えなくなったよ
杵島岳（きしまだけ）の歌垣（うたがき）は道が険（けわ）しいので
草を掴（つか）んで登ろうとしたのだけれど
間違（まちが）って彼女の手を取ってしまった

令和五年二月二十七日

大中臣正比呂　拙訳

【解説】

風土記と云う原書はない。奈良時代初期に書かれた、地方の物産と文化風物などの状況を地方官吏が朝廷に報告書として提出したものの後称である。肥前風土記は現在の佐賀県の、１３００年ほど昔の状況を記したものである。その逸文（他書が引用した文）の中に、今日の佐賀県杵島郡の歌垣の「お囃し曲」（音頭）がある。歌垣とは、今の合コンである。酒を手に、琴を抱き、宴をなして、若い男女が歌い、舞う。結婚相手を探す、春秋のお祭りである。歌には霰とあるから、収穫を済ませて民がホッとする晩秋の頃であろう。現代語訳に「歌垣」と書いたのは、「杵島岳」と聞けば誰もが歌垣の場所と分るので、原歌にその字句は無用なのである。

「曲」はブリと発音されるもので、拍子をつけて歌う曲を指す。今でも「身ぶり」「手ぶり」と動作を伴う表現に残っている。この歌は、祭りに参加した若い男女を、盛んに「はやし立てる」ものだから、原歌にはハヤシ言葉が付いていたと筆者は思う。短歌のようにスッキリと書かれているのは、地方官吏の報告書に書かれたものだからであろう。

大中臣正比呂　記